

伊豆の秋種

『新壘』
61-1号

末枯れては啼く声などは恃み得ず鈴より移す草ほと
とぎす

草ほととぎす啼くかと思ひ戯れに耳寄せてその声きか
むとす

人間に生きゐて背負ふ罪科の逃がるる道べに咲く著莪
の花

人間が人間を超えむとす巷に雨が降りぬきさしなら
ねば傘ひらく

みづからに打ち伏すわれを憐れまむ窓辺に月は夜毎
明るむ

冬の卓 『新壑』2号

くれなるの落葉踏みゆく昂りに死をはぐらかす企み
も誤算

独りゐてふたつの林檎置く卓の冬の余剰とふかかる明
るさ

冬の夜の卓に冷えゆく柿とわれ灯には交はるなく影を
置く

身の均衡みだるるまでを吹かれきて支へ温たき白樺大
樹

今更に謳ふてだてのをこがましますます肥るは無名の
華やぎ

抜けてきし夜の公園闇ながら見えくるものはわが小
世界

噴かざれば水の鬱屈身を濡らす冬冥き噴水の小休止

人とゐてにはかに寂しき日の暮れは棒状チーズ青紫蘇
にくるむ

夕焼けを背負へばほのかに温みくる冬の真実とひとと
訣れむ

きたきつね飼はれるること愉しまず咽喉のぞけるほどの
なま久伸

凍裂 『新壑』 61-4 号

ストールの房の穴まで凍らせて雪夜の道に蹟く決意

なまなかに在りしところは捨つるべしこの夜樹林に凍
裂あらむ

訣別を告ぐべき朝の身仕舞ひにつましく解くエプロン
の紐

人間が嫌ひそれより先づ嫌な己れが在りて終生を対
き合ふ

友として得たりし人を生涯の力とぞする空の紺碧

街川

『新壑』5
61-5号

少しづつ想念の鈍りゆくはさきはひか流れするとき春
の街川

雪解けの流れはげしき街川に夜が迫りてネオンも流
す

とことはにすがしくあらむ買ひ溜めし白き食器のみ棚
に並ぶる

過ぎしもの恋ふるうつに探しゆく雪昏らむ街の円型
ポスト

鏡面にタベ陽が射し明日はなき身のみづからに向ふは
哀し

柱時計

『新壑』
61-8号

みなづきのみづはたばしり
仰げば宙いつばいに枝張る桐
大樹

かつてはみどり児を抱きし腕にどくだみの白き花摘む
今を怖れむ

ほみつきし情性にあらねど融けざるものを融かしめて
鳴る居間の柱時計

歳あらたむるたび書き換ふる遺書に書き足すことの
或ひは饒舌

言ひつくし聴きつくしたる今にして眞実のひとつと雨の
紫陽花

夏の孤独

『新壑』
61-9号

生きもののなべて生きづく当然と初夏の風あり吹かる
る孤独

薔薇の刺猫の爪いづれ優しからざれど耀くはいくばく
尖るゆゑ

ジャスミンの香を湯に放ちやすやすと堕ちてはならぬ
浴槽地獄

風の匂ふタベ危ふき孤独感いつさいを捨てたれば孤独
も伴侶

めざすもの大方古りしふる里に織き喉に吹く草の笛

電気蚊取器

『新壘』
61-10号

背かるる愉悦もあらむこのちのわれの余生とふ杳き
歲月

陥ちてゆく眠りの中に手操れるはソケットに繋ぐ電気
蚊取器

靴紐を結び直して歩みゆく神に近き位置を確かむる
ため

合鍵を互みに持てる単純を絆となせり遠き母と息子

なかなか散らぬ黄薔薇をほぐしゐる詮なきことをつ
ぎつむるとて

訣れ
『新壘』
61-11号

度の強き眼鏡はづして何が見ゆまばたきせはしき汝の
放心

いちまいの景書に足らざる訣れゆゑ飛ばさるることな
く締めくくる

旅すらも想ひ出とならぬ虚しさよゆきつくひとりに
麦熟れわたる

帰るべきひとりとなりて背に負ふは余るいのちのこの光
のこと

百合

『新壘』
61-12号

ゆきゆけど未来は暗闇点ずれば灯る必然に抗ひ疲るる

積悪の日々に重ねて南瓜の微暗き華やぎの軀にふさふらし

しづかなる地震の過ぎたる暗がりに揺れたる程に百合は匂ひぬ

反論の敗れし悲哀にはつか嗅ぐ百合は百合のほかなき匂ひ